第3種郵便物認可

父を語る

船越 隆子　翻訳家

快活で頼もしい存在

「あんな外国のスターが徳島に来ることはめったにないけんな」。父はそう言って、フランスの人気歌手シルヴィ・バルタンのコンサートに連れて行ってくれた。1965年、私はまだ小学生だった。普通の外国人すら見る機会のない子供にとって、金髪の美しい彼女がステージで歌う姿は、まるで別世界の出来事のようだった。

父は、いつもそんなふうに新しくて面白いものを見つけては、いろんなことを教えてくれた。

大学を選ぶ際、地震が怖いから東京へは行かないと決めていた私に「一度は日本の首都で暮らしてみたら」と勧めたのは父だった。東京暮らしが、今の私の仕事や考え方に与えた影響は計り知れない。

どんなことを聞いても答えてくれたなあ、と今になって気づく。硬軟とりまぜて。しかもエンタメ系にはめっぽう強い。父自身も好奇心旺盛だったのだろう。

知識の情報源の一つは、新聞でなかったかと思う。うちにはいつも一般紙が3種類と経済新聞、それにスポーツ紙もあった。

父・船越久は、26（大正15）年に淡路島の廻船問屋に生まれ、太平洋戦争終戦後に兄弟と一緒に徳島に渡って木材卸業を始めた。製材所も設け、津田の木材団地ができると本社を移して事業を展開した。木曽や高知で開催される市へも、よく木材の買い付けに行っていた。

「材木の仕事って、どんなん？」。小学生のころ、尋ねてみたことがある。

「自分の目で選んで競り落としてきた丸太を製材し、お客さんがその値打ちを分かって買ってくれたときには本当にうれしい」と父は言った。お父さんはやりがいのある仕事をしてるんだなあ、と子供心にも感心したのを覚えている。

父はヒノキやスギなどの国産の良質な材木にこだわっていた。後に徳島木材市場の理事長を拝命し、周囲の方に支えられながら職務に尽力した。口癖は「よっしゃ、よっしゃ」。家族や親戚（しんせき）の頼みごとも聞いてくれる面倒見のいい父だった。

「徳島県表彰」を受けた父・船越久さん。母・千枝香さんと＝1993年、徳島市内

徳島中央ライオンズクラブの創立時からのメンバーでもあった。40年間所属。奉仕活動からスポーツやレクリエーションまで、会員の方と一緒にさまざまな活動をしたことは、父にとって大きな支えになっていたと思う。

その仲間と一緒に50歳を過ぎてから始めたテニスは、父の一番の楽しみとなった。はたから見ても驚くほど熱中して練習した。最初は私と同レベルの下手さだったが、しばらくたって帰省した際に相手をすると、もう追いつけないほど格段にうまくなっていた。

72歳で脳梗塞（のうこうそく）に倒れてから6年半に及ぶ闘病生活は、本人にとっては不本意なつらいものだったかもしれない。でも、大学の時から20年以上も離れて暮らしていた私にとっては、思いがけなく再び一緒に過ごせたかけがえのない時間だった。

（徳島市在住）